

首藤幹夫

Mikio SHUTO

中里和人

Katsuhito NAKAZATO

「Hachioji影絵プロジェクト」  
社会連携プロジェクトの記録

中野 純

Jun NAKANO

大学院プロジェクト授業「Hachioji影絵プロジェクト」(担当教員:中里和人、首藤幹夫、中野純)は、プロジェクト授業が大学院に初めて設置された2007年度にスタートし、今年度で15年目を迎えている。

影絵は写し絵とも呼ばれ、スクリーンの裏から絵を写し三味線と語りによって物語を見せる、アニメーションの原点とも言われる芸能である。1803年に江戸で始まり、八王子では明治の初めに影絵の名人玉川文蝶が登場したことで、八王子をはじめ多摩地区で大衆芸能として広まっていった。しかし、昭和になり映画などの娯楽が流行しだすと、影絵は姿を消してしまった。

「Hachioji影絵プロジェクト」では、消えた芸能文化である影絵を約70年ぶりに復興させ、写真とアニメーションの表現領域を横断させていく、懐の深い総合的な授業を生み出した。その上で、どこでも公演やワークショップができるメディア特性に着目し、社会連携を実践しながら、原初的な光学装置である幻灯機の魅力と、新たな映像表現の可能性を探究してきた。

社会連携を基軸にした15年間に及ぶプロジェクトでは、博物館、小学校、公民館やコミュニティセンター、老人福祉施設、NPO団体、ギャラリー、寺院、一般企業など、多岐にわたり社会の中での交流と展開の研究実績を積み上げてきた。

具体的なプロジェクト実践においては、公演現場になった地域社会をフィールドワークして物語化を行い、音楽、朗読、幻灯機制作、幻灯機操作、ワークショップなど、学生たちの様々な専門性を多面的に研究できる、地域デザインとアートを研究する総合型プロジェクトとなった。

影絵プロジェクトが開始されると、毎年いくつかの団体や機関から公演依頼が舞い込み、様々な人々との双方向型コミュニケーションメディアとして、大きな広がりを持った社会連携プロジェクトとなって成長してきた。

その15年間の活動をまとめ、社会連携の実践アーカイブ記録集となることを目指した。

## 1. はじめに

東京造形大学大学院プロジェクト科目として2007年度にスタートした「Hachioji影絵プロジェクト」。さまざまな社会要請の中から開講されたプロジェクト科目授業であった。目指していた研究テーマは、デザインとアートの研究制作を基に、影絵公演とワークショップを実施し、社会連携を通じた社会とのダイレクトな交流実践だった。

具体的な研究活動においては、分野の異なる学生たちの専門性を駆使しながら、公演先の物語をオリジナル制作し、スクリーンに写した絵に音と語りを付け、日本各地での公演とワークショップを実践してきた。これまでの社会連携先は、博物館や資料館や公民館、小学校などの教育機関、老人施設、町や市や都などの行政機関、アート関連団体、各種地域づくりのNPO団体など多岐に渡り、大きな社会的広がりとなってきた。

「Hachioji影絵プロジェクト」では、消えた芸能文化である影絵(写し絵)を約70年ぶりに復興させ、さまざまな表現メディアを横断させていく総合的な研究が始まった。

どこへでも公演やワークショップを届ける事ができるメディア特性を駆使し、原初的な光学装置である幻燈機の魅力と新たな映像表現の可能性を追求してきた。さらに、影絵公演とワークショップを通じ、地域住民やさまざまなコミュニティの人たちと交流し、コミュニケーションとしてのデザインとアートの方法を研究してきた。

本稿では、これまで15年間にわたる影絵プロジェクトの足跡を振り返り、各年度の取り組みについて記述し、影絵プロジェクトの実践の概要と、研究成果を記録することを主眼とした。

今後もプロジェクトの研究を継続させ、社会連携活動での方法論を発展させるために総括し、未来へのアーカイブとして残すことを試みた。

## 2. 影絵(写し絵)との出会い

「Hachioji影絵プロジェクト」が開講される前年の2006年。東京造形大学が設置されている八王子市の文化、伝統、歴史などの調査を開始した。大学が地域と社会連携しながら、新たな教育的取り組みができないかを調べるため、八王子市郷土資

料館を訪れた。そこでは、筆者の専門である写真、映像との関連を軸に、これからの時代に求められる社会連携や社会との繋がりへ広がっていきそうな資料やコンテンツを調査した。

調査の中、展示物の中に、レンズの付いた古い木製装置と鮮やかな絵の描かれたガラス板を見つけた。八王子市郷土資料館学芸員の神かほり氏の解説から、展示されていたのは、影絵で使用されていた明治期の道具類であることが判明した。

影絵は1803年に江戸で発明された幻燈機を基に生まれた芸能であった。ガラス板に絵を描き、その絵を風呂と呼ばれる灯りの点いた幻燈機に入れ、スクリーン裏から透過させて写し出す仕組みだった。スクリーン上では三味線と語りに合わせて絵が動き出す芸能として興行されていたのであった。

影絵のスクリーン上では、何台もの幻燈機が同時に使用され、主人公や脇役、背景が巧みに動き出し、それまでの映像体験にはなかった生命感溢れる世界を写し出していたのだった。

※全国的には写し絵と呼ばれることが多かったが、八王子一帯では影絵と呼ばれていた。一説によると、影の原義にはシルエットの影の他に、本物そっくりという意味がある。話の世界が視覚的でリアルに動き出し、本物らしい感情移入を喚起させるイメージからの命名だったのではないかと推察する。

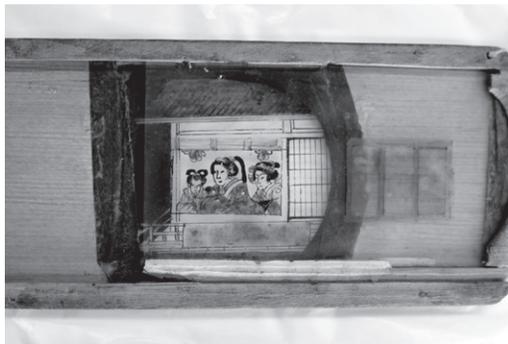
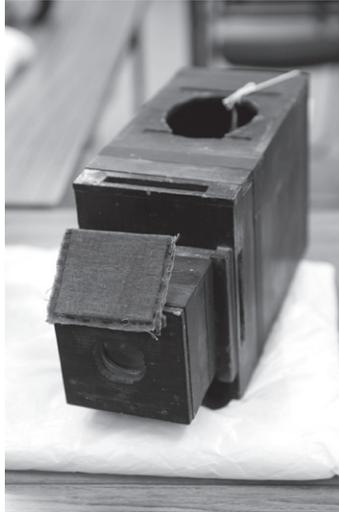
明治時代には、八王子市をはじめ、青梅市、福生市、あきる野市など、多摩地域で、影絵興行が広く行われていて、特に盛んだった明治初期には、八王子に玉川文蝶という名人がいて影絵で興行を繰り返していたことを知った。八王子は日本の中でも影絵が最も盛んだった地域であることが分かってきた。

そこで、資料館の影絵道具類が、実際に動く光景を見たいという想いと、原初的な光学装置としての影絵を復興し、新たな大学での研究ができないかとの構想が生まれた。

その構想に向けて、学芸員の神かほり氏の協力もあり、資料館のバックヤードに保存されていた影絵資料を拝見した。影絵の調査と平行して、研究授業として成立させる準備が始まった。

### 3. 八王子の写し絵

八王子の伝統芸能に車人形や説教節（もとは仏教の経典を説くものが、次第に大衆芸能化した語り芸）がある。写し絵はその説教節に合わせて演じられた見世物で、「風呂」と呼ばれる桐製の映写機にガラスに彩色した絵（種板）を仕込んで写して見せる幻燈の一種だった。



明治時代の風呂（上）と種板（下）（八王子郷土資料館蔵）

日本の幻燈史は、オランダから蘭学とともに幻燈機がもたらされた18世紀末に始まった。幻燈が日本で最初に見世物として登場するのは1790（寛政2）年、大阪の難破新地で、「彩色影絵オランダ細工」として興行され反響を呼んだという。1803（享和3）年に江戸で染物上絵職人、亀屋熊吉が苦心の末に木製幻燈機を作り上げ、三笑亭都楽と名乗って牛込神楽坂の茶屋 春日井で「江戸写し絵」を有料で公開した。これが日本の幻燈機と写し絵の始まりである。

その後、写し絵師たちによって日本各地で興行が打たれるようになったが、八王子には八王子派という一派らしきものがあり、それを作り上げたのが玉川文蝶（本名、野和田文永）といわれている。

玉川文蝶は、1819（文政2）年西多摩郡福生に生まれ、明治初年八王子大横町宝樹寺前にて玉川屋という旅籠屋をしていた。当時、八王子に流行していた説教節を近所の太夫から習い、どこで見たのか明治7、8年頃から写し絵をはじめ、その伴奏に説教節を合わせたという。



八王子の写し絵師 玉川文蝶の公演ポスター（明治初期／八王子市郷土資料館蔵）

当時、写し絵の道具類は八王子では手に入らず、文蝶は三笑亭都楽から買い入れ、絵は八王子周辺で説教節とともに流行っていた車人形の振りに合わせたものを描かせていたらしい。写し絵の絵師では都鏡が有名で、その絵は絶品と言われるが、八王子には都鏡の描いた高級品は残っておらず、最初は土地の者が描いたものを他の人が都鏡などに上手に描かせたのかもしれない。

八王子では、この世界で最も古い映像動画「写し絵」が、明治、大正、昭和初期に至る長い間興行され、娯楽として親しまれてきた。八王子はおそらく写し絵が最後まで生き残っていた場所の一つだったが、それも映画の普及などによって途絶えてしまうことになった。

### 4. 風呂の構造

日本の木製幻燈機は、形が昔の風呂に似ていることから「風呂」と呼ばれるようになったといわれる。風呂は光源を仕込む本体と映写用のレンズ部分に大きく分けられる。本体上部には、光源となる炎が当たる位置（ランプの場合はガラス筒の出る位置）に穴が開けられている。白熱電球を使用する場合は、通風口を残して蓋をする。本体正

面の前板(光源と逆側)を集光レンズの直径に合わせて丸く切り欠き、集光レンズをはめた板を上部のスリットから挿入する。

レンズ部分は投影用のレンズをはめた箱の筒を二重にして、内側のレンズ部を手で繰り出してピント調整を行う。この二重の筒を本体の前板に取り付ける。投影用レンズの上部には布製のシャッターをつけ、写さないときにはこのシャッターを垂らしておく。ガラスなどに彩色された絵を種といい、この「種」を長方形の板に並べて固定したものを「種板」という。この種板を風呂本体側面の差込口から集光レンズの前に挿入し、光源の光を集めて当て、投影レンズで映写する。

光源には、影絵が始まった明治期は石油を燃やすランプが使用された。影絵プロジェクトでは、2007年のスタートからしばらくはコード付き白熱電球を使用した。その後、コードレスのLED照明器具を使用し、照明器具のパワーを増強させながら現在に至っている。

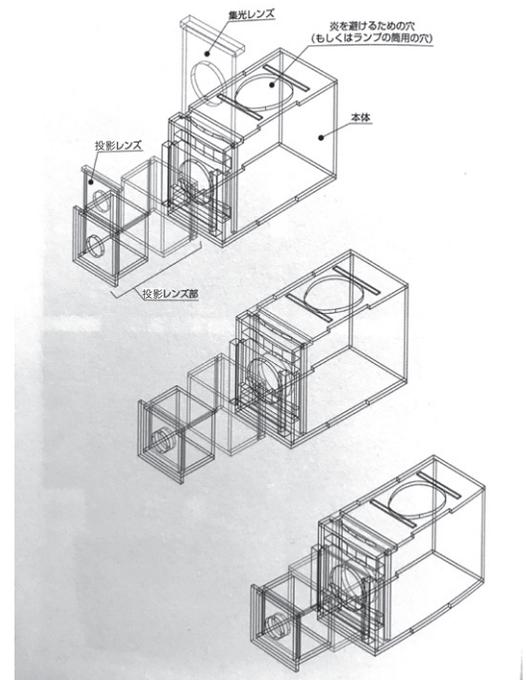


影絵プロジェクトで制作した風呂

## 5. 映写のしかた

写し絵の映写は幅の広い和紙スクリーンの裏側から行う。風呂を鳴り物や朗読に合わせて操作し、画面上で絵を合成する。各風呂の位置を変えて映像に動きを与えたり、映画と同じような技法(ズーム、オーバーラップ、フェードイン、フェードアウトなど)を手作業で行った。種板や風呂の交換は布製のシャッターを降ろして行う。

風呂とスクリーンの距離を変えて絵を大きくしたり小さくしたりするズームは、映写レンズの筒を動かしてピントを合わせながら行う。オーバーラップは二台の風呂の絵を重ね行う。絵の一部を隠すなどして効果的に演出することができる。レンズ前にある黒布のシャッターあるいは手を使って、光源をつけたままフェードイン、フェード



風呂(幻燈機)の仕組み

アウトの効果を出す。ちらちら点滅する効果を出すときも、レンズの前で手を振ったり、シャッターを開け閉めして行う。

種板：写すための絵。元来はガラス板に絵が描かれていたが、我々は薄い50ミリ×50ミリのアクリル板に、プラモデル塗料などで絵を描いてきた。絵の背景は光が透過しないよう黒い塗料を塗布している。これまで、ポジフィルム写真も使用してきた。最近ではOHPフィルムに出力した絵なども使用している。公演では複数枚の種板を張り合わせて投影している。

スクリーン：元来は和紙を使用していたが、我々は布を使用している。化繊系の布や絹で制作した。またワークショップ用に、アートトレーシングペーパーを使用した小さなスクリーンも使用してきている。



影絵プロジェクトで使用する種板

## 6. 各年度の取り組み

### 1. 2007年度

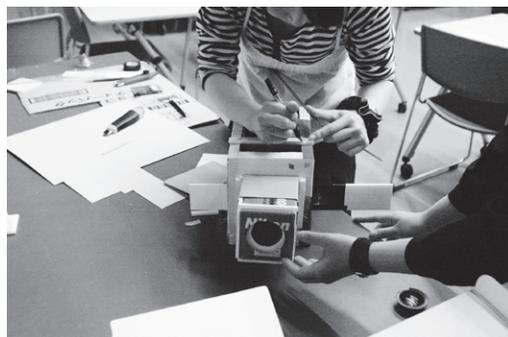
大学院で新しいプロジェクト授業が開講され、社会連携を目的とする授業群の一つとして、「Hachioji影絵プロジェクト」を開講させた。

まずは履修生とともに影絵資料のある八王子市郷土資料館を訪れ、八王子一帯の影絵を研究されている神かほり氏の指導のもと、収集されている影絵の道具類を調査させてもらった。

この年に取り組んだ研究目標は、以下の3点である。

- ①社会連携が可能な研究科目を開講させること。
- ②消えた芸能文化である影絵を約70年ぶりに復興させること。
- ③伝統芸能を現代に再生させ、絵、映像、写真、音、演劇的要素など、さまざまなメディア特性を横断させ、学生の専門性を活かすこと。そこに、現代のデザインとアートの文脈を加味し、広く社会の中で活動できる総合的な研究科目を立ち上げること。

これらの研究目標は短い期間に完成できるものではなく、中長期計画の構想を持って取り組むこととした。



八王子市郷土資料館収蔵の影絵の風呂(上)と種板(下)調査

①②の復興再生には2~3年、③の展開にはかなりの時間が要すると想定し、3~5年間の研究実践を経て、10年の研究実践を通じ完成させることを目指した。

まずは影絵用ハードの復元を試みた。室内建築の履修生が八王子市郷土資料館収蔵の風呂の実寸調査を行い、設計図面におこしてくれた。その寸法に即しながら、段ボールでの風呂の試作を繰り返し、ようやく手作りの風呂を完成させた。



試作した風呂でのデモンストレーション

種板はアクリル板を使用し、透明感のあるプラモデル用塗料を中心に、絵画専攻の履修生が中心になって、細い面筆でトレースした下書き用紙を模写するように絵を描いていった。

ソフトとして重要になってくるのは、シナリオと写し出す絵だった。シナリオに関しては、かつて影絵が伝統的に扱ってきた仏教説話、歌舞伎の演目、四方山話などの古典に依拠せず、公演を実施する土地の歴史や特性を加味した、現代的なオリジナルの物語を創作することを原則とした。その原則を踏まえることで、これから展開されていく地域社会との濃密でインタラクティブな関係性が創造されやすくなると考えたからである。

物語を構想していく過程で、八王子との物語の親和性を高めるために、高尾山で天狗の調査をした。また、浅草木馬亭で開催されていた、みんな座の写し絵公演を鑑賞した。

初年度は風呂の復元に時間を要したこともあり、八王子の夏祭りや高尾山の天狗伝説の短いお話と絵を描くことになった。公演では、演劇をやっていた履修生が、物語りの部分を朗読するスタイルを採用した。

### ●2007年度公演(成果発表)

①2007年11月25日「学生と市長とのふれあいトーク」

八王子市学園都市センターイベントホールで

われた八王子市主催のイベントで、八王子をテーマにした成果を八王子市長に提言する発表をした。影絵プロジェクトでは、かつて八王子にあった伝統芸能「影絵」を約70年ぶりに復元、復興させ、新たなコミュニケーションアートとして、現代の見世物公演を創造したことをプレゼンテーションした。その発表に対して高い評価を受け「優秀賞」が授与された。研究機関として大学が果たす役割を、八王子市との社会連携を通じ果たすことができた。



八王子市「学生と市長とのふれあいトーク」で優秀賞を受賞

## ②2007年12月1日「写し絵、車人形、説教節」展、影絵公演

社会連携先：八王子市、八王子市郷土資料館

八王子市郷土資料館主催の企画展「写し絵、車人形、説教節」展の関連イベントへの誘いがあった。資料館の部屋を暗くし、初めての影絵公演を実践することで研究授業が始まった。八王子市郷土資料館と社会連携を重ねながら、復元させた影絵を、広く社会に発表する機会を作ることができた。公演当日は、学芸員の方々、日本各地からの来場者の方々からアドバイスや激励をいただき、去年まで陳列されたまま実態がよく分からなかった影絵が、社会の中で産声をあげた瞬間だった。

公演を振り返ると、暗闇の中で何人もの履修生の身体が交錯し、幻燈機と絵が動き出すと、そこには観客を巻き込んでいく力が湧き起こった。映画館と同じ暗闇の中に像が写る劇場感覚と相まって、スクリーンにぼんやりとした灯りの像がゆらめく、鮮明な像には無い揺らぎの効果も生み出されていた。この時の感動は今も強く残っていて、影絵という古くて新しい出し物が、大きな社会性を持っている原点がここからスタートしたのだった。

初年度定めていた、①社会連携が可能な研究科目を開講させる ②消えた芸能文化である影絵を約70年ぶりに復興させるという2つの目標は、研

究成果として達成することができた。

プロジェクト名「Hachioji影絵プロジェクト」にHachiojiを冠しているのは、かつて影絵が盛んだった八王子の歴史と文化への敬意からである。さらに、八王子にある本学から、広く社会に向けて研究を発信させていく想いからである。初年度、八王子にゆかりがある伝統芸能の影絵を、社会連携の発展性が望まれる研究授業として立ち上げられたことは大きな成果であった。

## 2. 2008年度

2008年度、2年目を迎えたプロジェクトは、前年度未完だった物語の完成に努めることになった。物語のキャラクターである天狗のリサーチのために高尾山へ登り、題材の一部となる八王子夏祭りにも有志が参加し、公演時使用音源として夏祭りの音を録音し、物語を完成させていった。

ゲスト講師に、8ミリ映像作家の嶋田源三氏、瀧本慶吾氏、アニメ作家の村田朋泰氏、メディアアーティストの伊藤尚未氏をお招きし、さまざまな映像メディアの特質を比較検証しながら、八王子の高尾山を舞台にした「天狗の夏祭り」が完成した。



授業風景

### ●2008年度公演(成果発表)

#### ①2008年6月14日 影絵イベント「天狗の夏祭り」

桑沢デザイン研究所での日本玩具学会総大会のゲストイベントとして参加。影絵で使用する幻燈機を〈アナログ的な光のおもちゃ〉という概念で捉え直し、影絵の仕組みや仕掛けをスクリーン上で解説し、アナログの映像の可能性や手作りおもちゃとの親和性を実感してもらった。

#### ②2009年2月15日 影絵公演「天狗の夏祭り」

音楽：水野俊介(5弦ウッドベース)

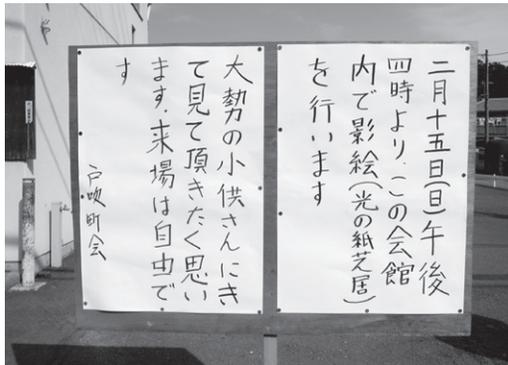
社会連携先：八王子市戸吹町会、八王子市郷土資料館



2007年度公演「天狗の夏祭り」(八王子市戸吹町旧会館)



影絵公演を待つ来場者(八王子市戸吹町旧会館)



戸吹町会が立ててくれた公演看板

本格的影絵公演「天狗の夏祭り」の初演となった。戸吹町会長中村孝治氏の協力のもと、回覧板で広く地域住民に影絵公演の告知をしてもらい、公演当日は会場の八王子市戸吹町旧会館に、小学生からご老人までの来場があり満杯となった。戸吹町の町内会と社会連携し、コミュニティの中で手作り感溢れる交流が行われた。

また、戸吹町旧会館は明治期に建てられた木造の元小学校で、影絵が盛んだった八王子地域の歴史を見てきた建物での記念すべき公演となった。戸吹町は影絵名人だった玉川馬蝶の出身地であることも判明し、明治期に盛んだった八王子の影絵が里帰りをするような記念すべき公演ともなった。

影絵公演と併せ、来場者に自由にスクリーンに写してもらおうワークショップも行った。来場者か

らは、「現代のアニメやゲームにはない手触り感が心地よかった」「子供にとって新しい映像との出会いがあった」などの感想が寄せられ、当プロジェクトが目指す公演を通じた社会交流が実践できたのだった。

### 3. 2009年度

桑都・絹の街として栄えてきた八王子の絹織物と影絵プロジェクトとの、産業とアートの新たなコラボレーションを模索する『Hachiojiシルクスクリーンプロジェクト2009』を立ち上げた。

八王子の地場産業である絹織物。そのシルクを衣料品ではなく上映用スクリーンとして活用し、我々の創作した影絵を上映することは、織物関係の方も我々も初の試みだった。透過光で上映される影絵は、背景から光源を当て絵だけをスクリーンに留めるというシルク地を作製しなければならず、試行錯誤の末に市内の岡村織物でスクリーンが完成した。国産の生糸を綾織りで制作してもらったスクリーン生地は艶やかなテカリがあり、写してみると今まで使ってきた化繊スクリーンにはない、深くて暖かな質感の映像を得ることができた。



公演用スクリーンを制作してくれた岡村織物の見学

その八王子産のシルクスクリーンを最大限に活かすため、八王子にゆかりのオリジナル影絵「シルクロード物語 巡るカイコ」を創作し、八王子市戸吹町旧会館(八王子で影絵が盛んだった明治期の小学校を移築した建物)の歴史的な時間を体感できる空間での公演となった。

社会連携の観点からは、シルクスクリーンを制作して下さった八王子織物工業組合や岡村織物など企業の方々、影絵に使用する古写真を提供して下さった八王子市郷土資料館、影絵プロジェクトに助成金を出して下さった、八王子地域の大学間連携を目指す大学コンソーシアム八王子の方々の協力、連携のもと、ダイナミックな社会連



八王子市の岡村織物で完成した影絵用シルクスクリーン

携事業の成果を生み出すことができた。

#### ●2009年度公演(成果発表)

①2009年12月22日 影絵公演「シルクロード物語 めぐるカイコ」

音楽：BOB

社会連携先：八王子市戸吹町会、八王子市郷土資料館、大学コンソーシアム八王子、八王子織物工業組合、岡村織物

物語は、八王子で生まれた蚕(かいこ)が、日本から中国、シルクロードを経て、トルコ、ローマに至る壮大なファンタジーを作り出した。八王子市戸吹町旧会館での公演では、シルクロードを巡る冒険旅行を、八王子産のシルクスクリーンに写し出すという、二つの物語性を紡ぐ広がりを持った成果発表となった。



会場となった戸吹町旧会館



2009年度影絵公演でのワークショップ

#### 4. 2010年度

プロジェクトが始まって3年間の活動は、大学のある八王子市内を拠点に行ってきたが、2010年度は、パルテノン多摩、江東区中川船番所資料館などの依頼を受け、八王子市からより遠くの土地への影絵公演やワークショップの展開が見られた。

影絵公演が本来持っているどこへでも出向き、さまざまな場所や地域で公演できる特性を発揮し始めた年になった。

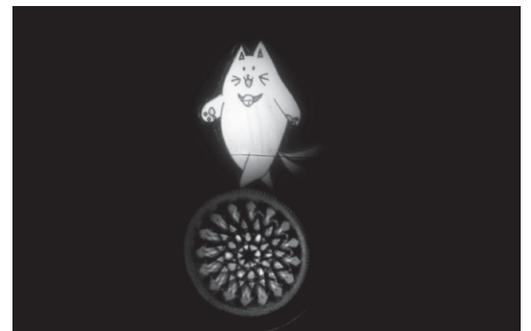
#### ●2010年度公演(成果発表)

①2010年9月11日 ワークショップ、影絵公演「海ねこ」

主催：パルテノン多摩

社会連携先：パルテノン多摩

パルテノン多摩からの公演依頼を受けて、物語キャラクターに多摩の地名から採った猫の〈たま〉を登場させ、発表する地域との関連性を考えた。パルテノン多摩ワークショップルームを会場にしたイベントでは、親子参加のワークショップが中心で、参加者が描いた絵を影絵の物語の中に接続させる公演を行った。各自が描いた5センチ四方の静止画が大きなスクリーンに写し出されると、観客から歓声が湧きあがった。影絵の時空間の中に、各自が描いた絵がアニメ(生命感)を持って動き出したのだった。アクリル板に絵を描く、その絵をスクリーンに写し、動かして物語化していくという一連の過程から、制作と鑑賞のインタラクティブな関係性が体験できるワークショップが実践できたのだった。



物語のキャラクターになった猫の〈たま〉

②2010年11月27日 影絵公演「中川妖怪絵巻」

音楽：シューヘイ

主催：江東区中川船番所資料館

社会連携先：江東区中川船番所資料館

江戸時代の江戸は、さまざまな川や堀が縦横無尽に結ばれた水運の都であった。その重要な水上



2010年度公演ポスター「中川妖怪絵巻」



展示されていた浮世絵（江東区中川船番所資料館）



中川船番所資料館の江戸時代のジオラマ空間での影絵公演



2010年度影絵公演「中川妖怪絵巻」

インフラを司るのが船番所であった。江戸時代に中川船番所は重要な関所として機能し、江戸の歴史的な水運遺産を現代に継承する資料館となった。

江東区中川船番所資料館を見学すると、館内の至る所に浮世絵が展示されていて、江戸時代の水辺の景観が甦ってくるようだった。学芸員の方の協力のもと展示されている浮世絵の複写をさせてもらった。館内に展示されている江戸時代の水辺のジオラマ空間を参考に、絵を浮世絵風にして、江戸時代にも盛んに描かれた妖怪をテーマにしたシナリオを構想した。歌川国芳、葛飾北斎、円山応挙、水木しげるなどの妖怪画も参照して物語を完成させた。

公演は江戸時代の船番所を再現した資料館の展示室で開催された。50名近くの来場者を前に、江戸時代を彷彿させる空間での、時空を超えたダイナミックな影絵公演となった。

## 5. 2011年度

2011年度は2つの公演依頼があった。1つ目は、東京都墨田区のアサヒ・アートスクエアから、江戸時代の芸能である影絵を、現代的な幻燈パフォーマンスとして上演してほしいとのことであった。空間に合わせた即興的な幻燈上演会を実践し、これまでの地域や公演場所との関係性とは異なる、若い観客に向けての現代的なアートとしての影絵に挑戦した。2つ目は、東京都武蔵野市の境南コミュニティセンターからの依頼で、影絵公演を実施した。

### ●2011年度公演(成果発表)

①2011年7月30日

音楽：シューヘイ

社会連携先：すみだ川アートプロジェクト事務局、アサヒ・アートスクエア

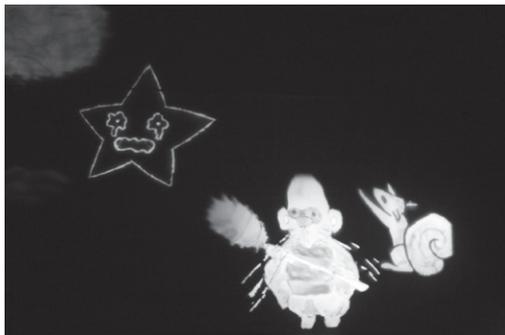
江戸時代の芸能である影絵を、アサヒ・アートスクエアの現代的な空間の中で幻燈パフォーマンスとして上演するのに合わせ、影のパフォーマー坂本宰氏の影とのコラボレーションも行った。暗闇の中での視覚的芸能としての影絵と、坂本宰氏の身体と影によるパフォーマンスとが結び、スクリーンに写るイメージの存在と不在の揺らぎ感を漂わせることができた。

②2011年12月11日 影絵公演「星みがき」

音楽：シューヘイ



公演ポスター「星みがき」



2011年度影絵公演「星みがき」

社会連携先：境南コミュニティセンター

ご当地での物語を創作するために、武蔵野市境南コミュニティセンターの近くにある国立天文台を題材に選び、天体にまつわるオリジナルのシナリオを制作し、影絵公演「星みがき」を実施した。

## 6. 2012年度

2012年度は、銀座のギャラリーでのキャンドルナイトに合わせた影絵パフォーマンスを皮切りに、相模原市民ギャラリーのワークショップ、小学校と老人施設での影絵公演2回と、合計4回のイベントを実施した。

影絵プロジェクトが目指してきた、子供からお年寄りまで、あらゆる年齢層の方々との交流やコミュニケーションができ、充実した研究年度となった。

### ●2012年度公演(成果発表)

①2012年6月23日 トウキョウミルクウェイ関連イベント／影絵上演

社会連携先：アースデイ東京事務局、ギャラリーナミキ

電灯を消してキャンドルを灯して過ごすアース

デイ東京のイベントに参加。銀座のギャラリーナミキで、影絵の幻灯機によりローソクの灯を写し出すなど、スローライフ的社會への提案を含めた即興表現を行った。影絵の幻灯の温もりあるイメージと、スローライフを提唱するアースデイとの連動性が感じられたイベントとなった。



アースデイに合わせたイベントで、ローソクを灯すパフォーマンス（東京銀座・ギャラリーナミキ）

②2012年10月13日 影絵ワークショップ「かけえのふしぎ」

社会連携先：相模原市民ギャラリー、相模原市教育委員会

JAXA(宇宙航空研究開発機構)のある相模原市に関連した「宇宙にいたら楽しいもの」をテーマに、参加者に絵を描いてもらい写し出す、影絵ワークショップを相模原市民ギャラリーで開催した。

③2012年11月26日 影絵公演「サーカスの森」

社会連携先：明日見らいふ南大沢

会場のケア付き高齢者住宅「明日見らいふ南大沢」は、老人施設なので高齢者が多く、幼い頃に学校などで幻灯機での教育を受けたことがある参加者がいて、影絵公演を見ながら昔の記憶が甦ってきたという感想を聞くことができた。また、現在の鮮明な映像表現にはない、影絵独特の暖かみを感じられたという貴重な意見もいただいた。影絵というアナログ的で手触り感の強いメディアが持つ、鑑賞者との間に生まれる間合いが程よく、ゆったりとした時間の中でお年寄りとの社会交流を実践した。

④2012年12月3日 影絵公演「サーカスの森」

社会連携先：八王子市立由木西小学校

八王子市立由木西小学校の体育館に多くの児童を招き影絵公演を行った。講演後のワークショップでは、白い体操服を着てもらっていたので、児童の体が絵を写すスクリーンに変身し、影絵を写



2012年度影絵公演「サーカスの森」



八王子市立由木西小学校での公演

して触るといふ、小学生との楽しい身体的ワークショップとなった。

## 7. 2013年度

2013年度は、前年度と同じ老人施設での公演と東京都東中野のポレポレ坐での公演、合計2回の影絵公演を実施した。

現在の老人施設では、限られたコンテンツの娯楽に終始することが多い中、影絵公演ができたことは、高齢化社会の中でこれからの芸能コンテンツや社会連携での将来性を感じることができた。

### ●2013年度公演(成果発表)

#### ①2013年10月21日 影絵公演「転々」

会場：ケア付き高齢者住宅 明日見らいふ南大沢  
社会連携先：明日見らいふ南大沢



公演での影絵解説(明日見らいふ南大沢)

#### ②2013年12月2日 まぼろし八景 影絵公演 「転々」×坂本幸の影

会場：東中野ポレポレ坐

社会連携先：ポレポレ坐



2013年度公演「転々」(東中野ポレポレ坐)



公演での音楽担当シューヘイ氏(左)と音楽担当学生

## 8. 2014年度

2014年度の活動は大きな展開となった。大学にゲストとして視覚表現研究家の松本夏樹氏を招き、明治時代の幻燈と手回しアニメーション鑑賞と、レクチャーを実施。音楽ワークショップなどで定評のあるロバの音楽座のアトリエを訪問、松本雅隆氏による古楽器演奏と、新聞紙を音の道具としたワークショップを体験した。

影絵公演では、大学付近の神奈川県相模原市の自治会館での地域公演を皮切りに、これまでで一番遠い地域である、宮城県と岩手県への地方遠征公演ツアーを試みた。2011年に発生した東日本大震災の現場を視察し、陸前高田市で復興活動を続けているNPO桜ライン311の岡本翔馬代表から復興に向けたお話を聞いた。現地に宿泊して、石巻市のNPO団体や陸前高田市の小学校との連携での地方影絵公演を行った。

大きな社会的課題のある震災地の公演では、子供からお年寄りまで多くの方々と触れ合い、デザインとアートを統合させた影絵が、人の心と心を結ぶ小さな糸口になることを体験した。どこでも公演できるプロジェクトは、まさに社会と交流し



古楽器奏者 松本雅隆氏による音のワークショップを体験（ロパハウス）



NPO桜ライン311岡本翔馬代表から震災復興プロジェクトの話聞く

連携していく、ダイナミズムを持った研究であることを実感したのだった。

#### ●2014年度公演（成果発表）

##### ①2014年11月22日 影絵公演「星うつし」

社会連携先：相模原市緑区当麻田自治会

神奈川県相模原市緑区当麻田自治会館での地域コミュニティの集いに合わせ、影絵公演の依頼があった。自治会館に子供からお年寄りが集まる中で影絵公演を行った。我々が研究しているデザインとアートの映像表現を通じた地域に根ざした社会交流となった。

##### ②2014年11月30日 影絵公演「星うつし」

音楽：シューハイ

社会連携先：一般社団法人ISHINOMAKI2.0、石巻 まちの本棚、NPO陸前たがだ八起プロジェクト

石巻市での公演は、地元で震災復興を担うNPO陸前たがだ八起プロジェクト、ISHINOMAKI 2.0、町の中に私設図書館を設置運用するまちの本棚の方々の協力のもとでの実施となった。石巻での影絵公演は、復興の拠点施設であるオートキャンプ場モビリア北集会所とIRORI石巻で2回開催した。復興の最中、影絵が表現したアナログ的な温もりのある光の質感が、来場者には心地よい

映像となって伝播されたようで、多くの方々が久しぶりに楽しく和む時間が持てたと感想を話してくれた。

会場となったIRORI石巻は、若い人を中心に意見情報交換が活発な震災復興の拠点となっていて、石巻のサードプレイスとして機能していた。

社会連携を目的としている影絵プロジェクトにとって、震災復興という大きな社会活動の中で公演できたことは、復興に向けて取り組む現地の方々との交流を通じての社会性を学び、大学の研究発信にとっても非常に意義深い活動となった。



宮城県の公演会場IRORI石巻



岩手県陸前高田公演での市民交流

##### ③2014年12月1日 影絵公演「星うつし」

音楽：シューハイ

社会連携先：陸前高田市立気仙小学校

岩手県陸前高田市立気仙小学校での影絵公演は、小学校の校庭にびっしりと震災仮設住宅が立ち並ぶ中、校長先生、教頭先生をはじめ、担任の先生と児童たちに迎えられての公演となった。

今回の「星うつし」という物語は、宇宙に旅をする未来志向のシナリオで、岩手県が生んだ文学者宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の死生観もメタファーにしたものだった。公演中、児童からはたびたび歓声上がり、公演後のワークショップでは、円形状にしたスクリーンに囲まれるように児童が入り、影絵のイメージに直に触れられるダイナミックなワークショップとなった。



2014年度影絵公演「星うつし」とワークショップ（岩手県陸前高田市立気仙小学校）



陸前高田市立気仙小学校担当教員と影絵プロジェクトメンバー

## 9. 2015年度

2015年度は、地域社会との活動として、東京都足立区、埼玉県川口市、八王子市などで社会連携事業を行った。町田市民文学館「ことばらんど」では、日影丈吉文学作品「かむなぎうた」の朗読に合わせた影絵公演を行い、新たなコラボレーションとしての社会連携にも挑戦した。

この年最大の活動は、地方遠征公演として山梨県富士吉田市から長野県小諸市にかけてのツアーだった。新作の物語「にじむ青」は、近未来の地球の姿が海中に展開される、不思議なファンタジーの世界を表現しようとした。富士吉田市では地域おこしの拠点となっているhostel&salon SARUYAで公演、小諸市では地域の文化交流拠点の一つである茶房読書の森で公演を行った。

6カ所の場所を巡った公演とワークショップは、かつて伝統芸能として八王子で興行されていた影

絵を現代に復興させた実感を持ち、新たな社会的なコミュニケーションメディアとしてのプロジェクト活動実践となった。

### ●2015年度公演（成果発表）

#### ①2015年6月6日 影絵ワークショップ

社会連携先：東京都足立区 ギャラクシティ

東京都足立区で多彩なワークショップを実施している「こども未来創造館」と「西新井文化ホール」の複合施設「ギャラクシティ」で、影絵ワークショップを開催した。

#### ②2015年9月22日 影絵ワークショップ

社会連携先：メディアセブン

埼玉県川口市にある現代的な表現メディアを紹介する施設「メディアセブン」で、江戸時代に生まれた映像メディアである影絵を、現代的なアートと感じられるワークショップとして展開した。

#### ③2015年11月6日 影絵公演「にじむ青」

社会連携先：月光寺劇場

山梨県富士吉田市で音楽、演劇活動の場所となっている月光寺劇場で、地域住民に向けた影絵公演を行った。地元の詩人遠山衛氏の朗読があり、芝居小屋のような小さな空間は、演者と観客との距離感が近く、劇場に漂う場所の持つ力を肌で感じる貴重な体験ができた。地域で劇団の活動をしている方との連携交流をかなえることとなった。

#### ④2015年11月6日 影絵公演「にじむ青」

社会連携先：hostel&salon SARUYA

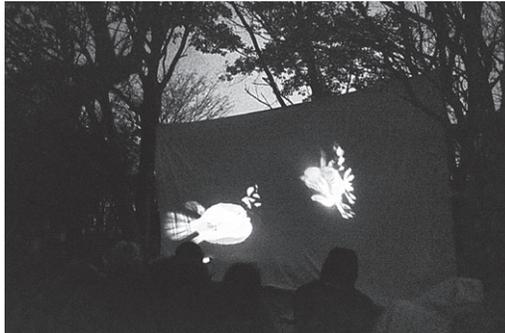
富士吉田市で地域おこし協力隊の活動をしている赤松智志氏が、古い店舗をリノベーションして作ったhostel&salon SARUYAで公演した。地域の若者たちのサードプレイスであり、富士登山をはじめとするバックパッカーの宿にもなっている場



2015年度影絵「にじむ青」ワークショップ（山梨県富士吉田市hostel&salon SARUYA）



2015年度影絵公演「にじむ青」(長野県小諸市読書の森)



所で、地域おこしのエネルギーを感じながら、若い町の住人たちとの交流ができた公演だった。

⑤2015年11月7日 影絵公演「にじむ青」

社会連携先：茶房読書の森、小諸市教育委員会

長野県小諸市にあるギャラリーと喫茶空間を持つ「読書の森」。野外の森にスクリーンを張っての公演となった。ミュージシャン佐々木良太氏の音楽演奏もあり、森の自然と影絵の幻燈の映像がゆらめき、ダイレクトに風や気温などの自然環境を体感できる初めての野外公演となった。多くの地域住民の方々との社会的交流を行った。

⑥2015年12月6日 影絵公演「にじむ青」

会場：八王子市生涯学習センター川口分館

社会連携先：八王子市生涯学習センター川口分館

## 10. 2016年度

2016年度は、前年度に引き続き山梨県富士吉田市と、新たに隣町の西桂町での公演とワークショップを実施。西桂町では町役場の方々と密接な交流を行った。さらに、八王子市を中心に多摩地域の伝統文化に焦点をあてたフェスティバル「多摩伝統文化フェスティバル2016伝承のたまてばこ」にも参加。多摩地域の伝統芸能である八王子車人形、秋川歌舞

伎など、大きな広がりの中で社会連携事業を行えた年度になった。

公演地である八王子の天狗伝説と山梨県の富士山の森や湧水に着想を得て、天狗の霊力や自然が持つ目に見えない力をテーマにした新作「天狗の落とし物」を公演した。



天狗のイメージを求めて高尾山へのフィールドワークを実施

### ●2016年度公演(成果発表)

①2016年11月22日 影絵公演「天狗の落とし物」

社会連携先：hostel&salon SARUYA

昨年に続き地域住民の来場者に囲まれて、山梨県富士吉田市のSARUYAでの公演を行った。

②2016年11月22日 影絵公演「天狗の落とし物」

会場：山梨県西桂町まちづくり交流センターぎずな未来館

社会連携先：西桂町、西桂町教育委員会、西桂町地域おこし協力隊

③2016年11月26日 影絵公演「天狗の落とし物」

会場：八王子市福傳寺

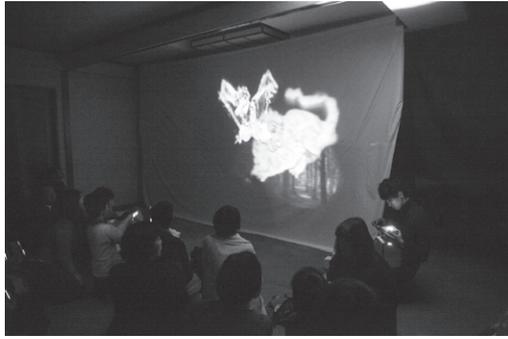
社会連携先：アーツカウンシル東京、八王子市、公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団、福傳寺



公演場所となった富士山が眺望できる西桂町



2017年度公演ポスター「おたまとジャックの水中絵巻」



2016年度影絵公演「天狗の落とし物」(山梨県西桂町まちづくり交流センターきずな未来館)



中国の影絵劇、皮影戲（ピーインシー）との交流

## 11. 2017年度

2017年度は、前年度に引き続き山梨県西桂町での公演とワークショップを行った。研究の一環として中国の影絵劇、皮影戲（ピーインシー）との交流を実施。影絵公演を通じ社会連携先の西桂町民の方々との交流を行った。



西桂町の織物工場の見学



2016年度影絵公演「天狗の落とし物」(八王子市福傳寺)

### ●2017年度公演(成果発表)

①2017年12月10日 影絵公演「おたまとジャックの水中絵巻」

音楽：大野慎矢

社会連携先：西桂町、西桂町教育委員会、西桂町地域おこし協力隊

西桂町とは2年目の社会連携だったこともあり、役場からの全面的な協力を得ながら、6月に町の下見、ロケハンを行った。富士山の湧き水に恵まれた町をテーマに、自然環境と風土の特性を盛り込んだ作品を、西桂町まちづくり交流センターきずな未来館で公演した。郷土史家の武藤啓子氏、地域おこし協力隊の寺田哲史氏の協力も得て物語



影絵ワークショップ (西桂町まちづくり交流センターきずな未来館)



音楽を担当した大野慎矢氏

が完成し、多くの町民の来場者との交流を果たした。

## 12. 2018年度

2018年度は、東京・青梅の狼信仰と雪女伝承を新たな題材として、小泉八雲の再話小説「雪女」をもとに、現代版雪女のオリジナル作品を生み出した。その過程で、雪女伝承の残る青梅市街や狼信仰の聖地御岳山を実地視察した。また、研究の一環として、影のアーティスト、坂本幸氏のパフォーマンスを体験した。その経験をもとに、生身の人間のシルエットを写す影絵と、幻燈機の影絵を複合する新たな表現を試みた。

### ●2018年度公演 (成果発表)

①2018年12月9日 影絵公演「狼森と雪女」、ワークショップ



青梅市の昭和レトロ商品博物館で「雪女」の調査を行った。

音楽：大野慎矢 朗読：加藤亜依

社会連携先：ダイニング&ギャラリー 繭蔵

公演では、演者による生身の「雪女」の影を登場させながら、現代版雪女の物語を表現した。ダイニング&ギャラリー繭蔵での公演当日にワークショップを開催し、参加者に描いてもらった狼の絵を劇中に登場させた。「作る」と「見る」という2つの立場で住民が参加する影絵公演となった。

## 13. 2019年度

2019年度は、前年の公演「狼森と雪女」をリメイクして、雪女が現れたと伝わる川辺の近くに建つお寺で上演。前年同様、公演前にワークショップを行って、来場者に種板の絵を描いてもらい、それを物語に組み込んで写した。

公演後には風呂操作などの体験をしてもらった。続いて、影絵公演関連イベントとして、雪女が出たとされる冬の夜に雪女伝承の地を訪ね歩くナイトウォークを催行 (東京造形大学見える化プロジェクトのイベント)。雪女のファンタジー世界を、青梅の土地によりリアルに結びつけてもらえるよう工夫した。さらに、公演の翌日から2週間にわたって、青梅市街のカフェで「Hachioji影絵プロジェクト概要展」を開催。影絵公演にさまざまなイベントを複合することで、いくつかの点が線となって繋がり、地域内での社会連携の多様性と広がりを追求することができた。



公演前の授業と準備風景



2018年度影絵公演「狼森と雪女」(ダイニング&ギャラリー繭蔵)



青梅市多摩川沿い「雪女」伝承の地を巡るナイトウォーク(案内人・中野純)

## ●2019年度公演(成果発表)

①2019年7月20・30・31日 ワークショップ「写し絵制作・発表・体験教室」

社会連携先：伝統文化ふれあい事業実行委員会、  
八王子市学園都市文化ふれあい財団

小中学生を対象に、種板を制作し投影するワークショップを八王子市芸術文化会館(いちようホール)で開催。アクリル板に絵を描いてスライド



ワークショップ「写し絵制作・発表・体験教室」(八王子市芸術文化会館)

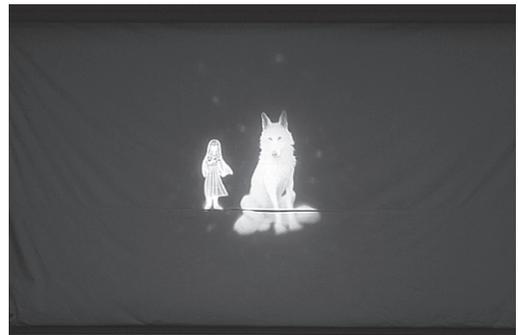
をつくり、それを暗闇の中で写し、自分の体で絵を動かすという体験を楽しんでもらった。

## ②2019年12月4日 影絵公演「狼森と雪女」

音楽：大野慎矢 朗読：加藤亜依

社会連携先：青龍 kibako、青梅市、宗建寺

「狼森と雪女」をさらに練り上げ、完成度の高い影絵作品とした。青梅市の「雪おんな縁の地」の近くに建つ宗建寺さんの協力のもと、宗建寺客殿にて上演。青梅市民だけでなく、遠方からの来場者もあり満員の中での公演となった。



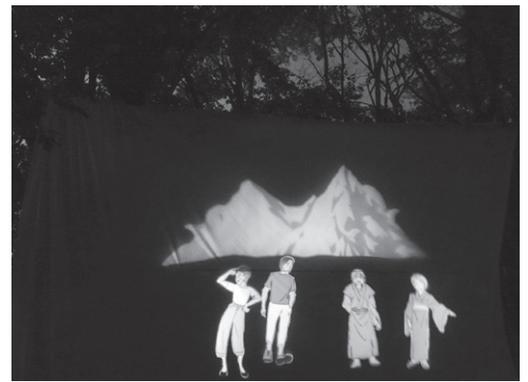
2019年度影絵公演「狼森と雪女」とワークショップ(宗建寺)

## 14. 2020年度

影絵プロジェクトでは、公演場所を実地調査し、その場所性を反映させた物語を制作し、現地で上演することで社会との交流や連携を完遂させている。それゆえ、2020年度の活動は予期せぬコロナ禍の中で困難を極めることとなった。しかし、遠



2020年度公演ポスター



2020年度影絵公演「氷穴への旅・雪女2020」(読書の森)



会場となった読書の森での公演準備



公演後の交流会

隔授業で歴史や民俗を調べる時間とシンキングの時間を持てたことで、青梅の狼信仰と雪女伝承への理解を深められた。

さらに、もう一つの公演先である信州・小諸の水集落にある、氷風穴の地下世界を物語化することができた。遠く離れた青梅市と小諸市のローカルリティを同時に再発見し、相乗効果を生み出す新たな取り組みとなった。また、小諸市で会場になった茶房・読書の森では、森にスクリーンを張って公演したため、物語を支える自然環境の不思議な力を表現することができた。地元のギャラリーが中心になった社会連携であったが、次年度以降のさらなるプロジェクトの深化を予感させる公演となった。

#### ●2020年度公演(成果発表)

①2020年10月31日 影絵公演「氷穴への旅・雪女2020」

音楽：大野慎矢 朗読：加藤亜依

会場：茶房・読書の森

社会連携先：茶房・読書の森、小諸市教育委員会、NPO法人本途人舎、NPO法人こもろ情報ひろ



社会連携先「読書の森」の方々と記念写真

ば、NPO法人虔十公園林の会

②2020年11月15・21・22日 伝統文化ふれあい事業 写し絵制作・発表・体験教室

音楽：大野慎矢 朗読：加藤亜依

会場：八王子市学園都市センター

社会連携先：伝統文化ふれあい事業実行委員会、

八王子市学園都市文化ふれあい財団

③2020年12月19日 影絵公演「氷穴への旅・雪女2020」

音楽：大野慎矢 朗読：加藤亜依

社会連携先：ダイニング&ギャラリー繭蔵、青梅市



八王子市学園都市センターでのワークショップ

ダイニング&ギャラリー繭蔵での公演前の描画ワークショップの開催は控え、公演には入場制限も設けたため、社会交流を十分に行えなかったものの、3年間にわたって取り組んできた現代版雪女の物語世界は、より豊かなものにすることができた。

## 15. 2021年度

2021年度は、5月の公演前に緊急事態宣言が発出されるなど、引き続きコロナ禍の中で制約を受けながらの活動となった。しかしその分、公演する地域の風土と、その土地の持つ力をじっくり探究しながら物語をつくることができた。また、コロナ禍そのものを題材とすることで、ローカルとグローバルの両面から、深く社会に関わるオリジナル作品を提示することができた。

5月と7月の八王子のイベントでは、これまで幾度も取り上げてきた高尾山の天狗を、地域住民とその土地の自然の力を結びつける媒介者としてフィーチャーした。

10月の長野県小諸市の公演では、氷風穴の歴史と魅力を具現化した「繭姫」という新キャラクターを設定することで、新しい地域デザインを地域住民とともに育む場として影絵公演が機能し得ることを示せた。12月には、Hachioji影絵プロジェ



影絵プロジェクトの授業風景

クトの15年間にわたる活動・研究が評価され、2021年度桑沢学園賞の受賞が決まった。

### ●2021年度公演(成果発表)

①2021年5月30日 「伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル2021～」影絵公演「高尾山の天狗火」

音楽：BOB 朗読：加藤亜依

社会連携先：アーツカウンシル東京、八王子市学園都市文化ふれあい財団

高尾山の天狗伝説に材を取り、高尾山の自然の力と人間の力を合わせることで疫病退散を願うオリジナル作品を八王子市芸術文化会館(いちょうホール)で上演。緊急事態宣言発出により、急遽、無観客でオンライン配信となったが、コロナ禍での疫病退散をテーマにした公演は好評を博し、海外からの問い合わせもあった。社会連携は顔の見える相手との協働が原則であるが、今回はネット空間での新たな社会連携のありかたを探ることができた。

②2021年7月24・25・31日 伝統文化ふれあい事業 写し絵体験教室

音楽：BOB 朗読：加藤亜依

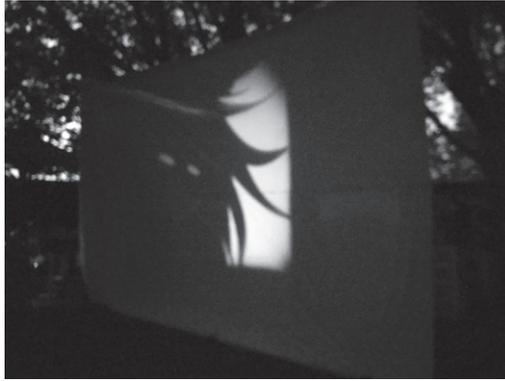
社会連携先：八王子市学園都市文化ふれあい財団

再び、八王子の親子を対象にした影絵ワークショップを、八王子のいちょうホールで3日間にわたり開催。最終日には特別版の「高尾山の天狗火」を上演し、子どもたちが描いた森のキャラクターたちを物語に登場させて、高尾の森の豊かさを表現した。

③2021年10月30日 影絵野外公演「氷風穴天狗森」

音楽：BOB 朗読：加藤亜依

社会連携先：小諸市教育委員会、小諸市氷区、氷



2021年度影絵公演「氷風穴天狗森」(読書の森)



公演後に挨拶する地元「氷風穴の里保存会」会長の前田富孝氏

風穴の里保存会、NPO法人本途人舎、NPO法人こもろ情報ひろば、NPO法人リベルテ、NPO法人虔十公園林の會、信州音あそびの會、ブリッジサウンドデザイン

「高尾山の天狗火」を下敷きにしつつ、新たに公演先周辺にある浅間山の天狗伝説及び氷風穴に材を取って物語を膨らませた「氷風穴天狗森」を、昨年に続き長野県小諸市の茶房・読書の森で野外上演した。

公演には親子連れからお年寄りまで大勢の地域住民が来場してくれた。特に、物語の舞台になった小諸市氷区の「氷風穴の里保存会」の方々が来られ、地域資源である氷風穴を守ることの意義についてお話を伺えたのが大きかった。影絵の物語ではファンタジー色が強いのだが、今回は氷風穴

の里保存会によるリアルな景観保存とも連動して、地域デザインとしての社会性を感じることができた。他にも行政や団体から計9つの後援や協力を得て、プロジェクトが目指してきた充実した社会連携、社会交流を果たすことができた。

## 7. おわりに

2007年度に、消えた芸能文化である影絵を約70年ぶりに復興させ始まったプロジェクトは、原始的な光学装置である幻燈機の魅力と新たな映像表現の可能性を様々に研究してきた。

ここまで研究が継続できたのは、履修学生たちの活動は言うに及ばず、毎年公演先の施設や機関、団体などから公演依頼を受け、社会的要請に支えられてきたからだった。

15年間の活動での社会連携先は、博物館、資料館、公民館、小学校などの教育機関、老人施設、町や市や都などの行政機関、アート関連団体、各種地域作りのNPO団体など多岐に渡り、実に大きな社会的広がりとなっていた。

また、どこへでも公演やワークショップを届ける事ができるメディア特性を駆使し、遠くは山梨県、長野県、宮城県、岩手県へと公演先を広げ、伝統芸能を継承するだけでなく、現地の特性を調査しオリジナルのご当地物語を創作してきた。

その活動を総括すると、影絵公演とワークショップを通じ、地域住民やさまざまなコミュニティの人たちと交流し、社会連携を通じたデザインとアートの方法論の研究を重ねることができたのだ。その成果として、総合芸術としての影絵の魅力が、社会へと還元されていったものと考えている。

これまで、影絵プロジェクトへご協力、ご支援いただいた多くの方々に心より感謝している。

最後に、この研究を担ってきた教員の言葉を列記し、研究の意義のまとめとしたい。

### 学びとしての経験

小林貴史(東京造形大学教授/2007年度~2010年度担当教員)

風呂から放たれた淡いあかりによって薄いシルクの布に写しだされた影絵は、決して最新のプロジェクターが投影するような高彩度の画像ではな

い。しかしそのおぼろげな像の存在は、闇の中で観客との境界をもあいまいなものとし、観客は見る、見られるという関係から自由となり、影絵が繰り広げる物語と一体化するかのような経験をもたらす。それは、現代においてテクノロジーを駆使したデジタル表現や体験型のワークショップが求める経験のあり方を、江戸のころから八王子の地で上演されていた写し絵としての影絵が示唆してくれているかのようである。八王子の伝統芸能である説教節に合わせて写し出された影絵からは、当時の子供をはじめとした観客は、今日のバーチャルな体験とは異なる日常生活や自然と地続きとしてある異空間を感じ取り、その場に参加することそのものを楽しんでいたのではないだろうか。このことは影絵の上演が一つの表現としてだけでなく、その土地の人々が集う機会として老若男女が世代を超えて伝え合い、コミュニケーションを深める、まさに娯楽を通じた学びの場となっていたと考えることができる。

本学大学院影絵プロジェクトの学生たちは、さまざまな地域に赴き、自らの手によって影絵の上演を試みることから、時の流れの中に埋もれかかっていた古くも新しい表現の方法と人々が集う学びの場がもつ意味や価値を実感としてとらえることとなった。物語を創作し、種板を描き、自作の風呂で写す。集団としての活動は、その過程において人や物との様々な関係を生み出し、一つのことを与え、受容するということに留まらない新たな可能性をも生み出していった。

近年、教育の現場ではその充実を図るためにICTの活用が求められ、またコロナ禍への対応が契機となり遠隔での教育のあり方も急速に模索されている。このような状況において、影絵をつくり上演するという活動は、豊かな学びを形成していくために必要とされる経験のありようにあらためて気づかせてくれる。このことは、学生自身の研究への取り組みを支え、大学における教育課程を社会につながるものとして構造化する重要な意味を持つてくるのである。

#### その土地の持つ力にバックライトを当てる装置

中野純（東京造形大学非常勤講師／2021年度担当教員）

Hachioji影絵プロジェクトは、さまざまな地域に向けた物語を創作、上演してきた。その土地へ

足を運び、その地域について調べ、地域に埋もれていた物語の種を発掘する。それをもとに新たなキャラクターと物語を育て、その土地の持つ力をデザインし直す。

ここ数年、青梅の雪女伝承から雪女の末裔の雪子、高尾山の天狗伝説から天狗攫いにあった少女ユイ（山と人をつなぐ「結」を意味する）、信州・小諸の氷風穴の歴史から蚕種の神の繭姫などのキャラを作り、各地の風土と住民の新たな関係の可能性を暗示したことは、公演を観にきた地域住民にとって、よい刺激になったという手応えを感じた。2019年の青梅・宗建寺での公演は、雪女出現地を巡る闇歩きツアーや、川の神の気配を写真と文章で表現する展示と組み合わせた。青梅の雪女を、多摩川の恵みを守る水の女神と解釈し、多摩川を中心に青梅を捉え直す視点とともに、ほとんど忘れられていた「河辺の渡し」跡周辺を、雪女の末裔が新たな物語を紡ぎ得る場所として呈示することができた。

影絵は、非常に暗い空間で映写される。最初期には菜種油に灯芯を浸して火を点し、それを光源にしてガラス絵を和紙に投影した。それは闇に浮かぶ幻影のようなものであったし、光源がLEDになった今でもそうした夢幻性は生み出せる。暗闇に大勢が集って、超自然的なキャラが舞う夢幻物語空間を共同体験することは、本来、夜の深い闇の中で行われていた祭りに近い。祭りとは、その土地の持つ力に集団でアクセスを試みる時間だ。地域が忘れかけていたその土地の力にバックライトをそっと当て、その土地の力への新しいアクセスのしかたを示し、祭りのような昂揚感によって新たな地域デザインへの情熱を共有する……。そういう装置として、影絵は豊かな可能性を持っている。

#### 影絵プロジェクトに携わって

首藤幹夫（東京造形大学教授／2010年度～2021年度担当教員）

#### <影絵の魅力>

影絵公演が始まり、照明が消されると、暗闇に光の絵が浮かぶ。絵をうつしている様子はスクリーンの裏側に隠されて観客からは見えない。絵だけが動き、漂う様を見ながら、観客は「どのようにつけているのだろうか」と、不思議な感覚になる。これこそが「影絵」の最大の魅力である。暗闇こそが舞台装置であり、観客に想像させる余

地を与えるのだ。

影絵プロジェクトが研究対象としている「写し絵」は、江戸後期にオランダのマジック・ランタンを手本にして作ったと言われている。当時の資料を見てみると、「仕掛け」と呼ばれる絵が動く仕組みがよく似ており、江戸時代の人々がマジック・ランタンのうつし出す構造をよく研究していると、現代の我々から見ても感心させられる。

Hachioji影絵プロジェクトに携わってきて、常に感じていることだが、このような古い時代の知恵との対話は、エルキ・フータモ氏の『メディア考古学』で語られる伝統の発掘という作業とも重なって、プロジェクトの学生たちにも大きな影響を与えている。現代のメディアの中でしか思考できなかった発想の遠近法がより遠方へと投げ出されるのだ。

以前学生から「江戸時代からカラーでうつしていたんですか？」と、質問をもらったことがある。確かに古いものは白黒と自然に考えてしまうのはよくわかる。しかし、白黒表現はフィルムという記録媒体の登場によって見出された新しい視覚表現であり、江戸時代には古さと白黒は結び付いてはいなかっただろう。日常的に慣れすぎたメディアの概念を考える上で、大変興味深い質問であった。

#### <公演という共同制作>

影絵公演では会場に着くと、まずスクリーンを張る作業から始める。スクリーンを張ることは、サーカスの天幕が組み上がるように、演劇的空間が立ち上がる象徴性がある。スクリーンは、風呂操作のためのスペースを確保するために、スクリーンの裏側に約5メートルの奥行きが必要なので、部屋の中央あたりに設置することが多い。通常は撮影用の機材を組んで設置するが、野外での公演では樹木に紐をかけて張ることもある。

次に風呂を準備し、学生たちは自分の担当の種板を確認してスタンバイする。1枚の種板には3～4個の窓があり、登場する順番や仕掛けの効果によって絵が配置されている。演出効果から、ひとつのキャラクターを複数人で交代しながらうつす場合もあり、この種板の設計や配役設定は、事前準備として大変重要である。

公演中は暗闇の中で風呂を操作しなければならない。一度に4つや5つの風呂を同時に扱う場合には、他の風呂の光にかかって演者の影をスクリ

ーンに出さないように注意する。風呂の操作は映像表現でありながら、身体的な演技を求められるのだ。これらをスムーズに行うためにも演者の間の連携が大切になる。

リハーサルや公演を経験する中で、学生は自分の役割を見出し、共同制作で自然に作品を作り上げていく。最初はぎこちない動きだった物語が、ある瞬間から動き始めるのだ。普段は個人制作の多い学生たちが、共同制作の楽しさを少しでも感じてもらえたならば、影絵プロジェクトの授業は成功と言える。

---

#### 専門性と総合性から生み出される社会プロジェクト

中里和人（東京造形大学名誉教授 2007年度～2021年度担当教員）

2007年夏、復元した風呂（幻燈機）にスイッチを入れると、暗い部屋の中に鮮やかな天狗の絵が浮かび上がった。その瞬間、学生からは歓声と拍手が湧き起こった。それは、八王子で消滅していた伝統芸能の影絵が70年ぶりに蘇生した瞬間であった。裸電球を光源にした暖色系の絵は、光のオブジェのような輝きを発していた。

日々進展していく視覚メディアの中にあって、手描きの絵をスクリーンに写すという原初的視覚体感が、手触り感の強い光のイメージとして出現したことは新鮮な驚きだった。この時から、影絵が放つ光と絵のリアリティを研究することが始まっていったのだ。

影絵プロジェクトで取り組む項目は実に多様である。参加する学生の専門性を考えてみると、絵を描く（絵画、アニメ、グラフィック専攻）、写真撮影（写真専攻）、幻燈機制作（室建、インダストリアルデザイン、写真専攻）、メディアアートの演出（メディアデザイン専攻）、ポスター、パンフレット制作（グラフィック専攻）、ワークショップ（造形教育専攻）、シナリオ、演出、音楽、演劇要素など、学生たちの専門性が活かされる総合的なプロジェクトであることが分かる。また、身体パフォーマンス系授業のない当大学においては、貴重な身体表現が実践できるプロジェクトとしての活動ともなった。

15年間に渡り日本各地で公演を重ね、公演場所の自然、歴史、文化に触れ、様々な団体や組織、教育機関などと社会連携での実績を積み上げてき

た。これまで約50の相手先と社会連携を実践し、幼稚園児からご老人まで数多くの地域住民の方々に公演を見ていただいた。同時にワークショップを行い、実験と遊びを融合させた、新たなデザインとアートを生み出す総合性のあるメディア研究をしてきたのだった。

これからも、どこへでも出かけていける興行芸能だった影絵の特徴を活かし、現場での地域デザインと社会交流を基調に公演やワークショップを実践し、大学院での研究成果が、大学はもとより広く社会へフィードバックされていくことを心より願っている。

担当教員：白澤宏規(2007年度～2008年度)、小林貴史(2007年度～2010年度)、中里和人(2007年度～2021年度)、首藤幹夫(2010年度～継続中)、中野純(2021年度～継続中)

文責：中里和人(2006年度～2017年度)、中野純(2018年度～2021年度)

復元・復興された八王子の影絵 (写し絵)



影絵名人玉川文蝶の公演絵図(明治初期/八王子市郷土資料館蔵)



影絵で使用する幻燈機の風呂(明治初期/八王子市郷土資料館蔵)



影絵プロジェクトで復元完成させた風呂



影絵で使用する物語の種板(明治初期/八王子市郷土資料館蔵)



影絵で使用する物語の種板(明治初期/八王子市郷土資料館蔵)



種板(明治初期/八王子市郷土資料館蔵)



影絵プロジェクトで復元完成させた種板



影絵プロジェクトで復元完成させた風呂



風呂の制作



風呂の制作



影絵公演の準備をする学生たち（東京都青梅市 ダイニング&ギャラリー 繭蔵）



2021年度公演「水風穴天狗森」。天狗の靈力で疫病退散を願う物語。スクリーンに現れた6つのキャラクターは、6台の風呂で写している。

各地での影絵公演



2020年度影絵公演「氷穴への旅 雪女2020」(長野県小諸市 茶房読書の森)



2010年度影絵公演「中川妖怪絵巻」(東京都江東区 中川船番所資料館)



影絵公演ポスター「中川妖怪絵巻」



影絵公演ポスター「おたまとジャックの水中絵巻」

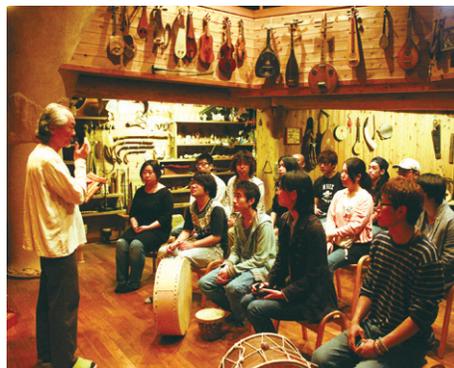


影絵公演ポスター「氷穴への旅 雪女2020」

各地での影絵ワークショップ



2014年度 来場者と影絵を体験するワークショップ(宮城県石巻市 IRORI)



2014年度 ロバの音楽座代表松本雅隆さんから音のワークショップ指導を受ける。(立川市 ロバハウス)



2014年度 来場者と影絵を体験するワークショップ(宮城県石巻市 IRORI)



2018年度 種板の絵を描くワークショップ(東京都青梅市 ダイニング&ギャラリー 繭蔵)



2016年度 福傳寺境内での路上幻燈パフォーマンス(八王子市福傳寺)



2021年度 公演後に地域の方々との交流を実践した。(長野県小諸市 茶房読書の森)